

盲学校での5年間

町村茂子

何しろ最初に電話を受けた時、「文京農学校」と聞き違えた程だから、私の視覚障害者への意識は皆無に近かったといえよう。都の教員試験に通って、当然どこかの都立高の教員になるだろうと思っていた、昭和58年1月末のことである。

さっそく面接に行ったところで、盲学校とはどんなところなのか、具体的には何もわからない。しかし、こちらから選べる立場ではないのと、生来の無鉄砲さから、たいした躊躇もなく引き受けてしまった（漠然とした不安を好奇心で打ち消してしまう思慮の浅さは、私の数多い欠点のひとつである）。

都立文京盲学校は、高等部だけの学校で、高校の普通教育を施す普通科と、その修了者に対し、あんま、鍼灸師としての職業訓練を行う専攻科とに分かれている。全生徒は約150名で、普通科の社会科教諭として、私は採用されたのである。

盲学校といっても生徒は様々である。校内では、普通文字を使う生徒を弱視生、点字を使う生徒を全盲生とわけてはいるが、それぞれその“見え方”“失明理由”“失明時期”は違う。

また、高等部入学前の教育歴も異なり、幼少時から盲学校で過ごしてきた者、普通校で、いわゆる“統合教育”を受けてきた者がいる。さらに、盲学校の生徒の大きな特色は、学力差が極めて著しい点であろう。東京都では、障害者教育に、「全入制」をとっているため、校内には、学年相当の学習が可能な単一障害者もいれば、精薄との重複障害者もいるのである。当然、カリキュラムも異なり、授業はいくつかのグループに分けて行われる……。以上のことは、4月当初のオリエンテーションで知った。

さて、勇躍とまではいかないまでも、それなりにはりきって教壇に立った私が、地理の授業でまず驚いたのが、私と生徒たちの空間認識の違いである。このことについては、以前『地図情報』に詳しく書かせていただいたが、要するに、聴覚・触覚・嗅覚などを総合しても、空間認識においては視覚の持つ情報量に遠く及ばないということである。特に、幼児期以前の失明者で、視覚体験を全く持たない生徒の空間認識を、私たち晴眼者が想像することはできない。しかし、晴眼者が作ったこ

の都市空間の中で、初めてのところへでも、一人で、安全に、そしてなるべく効率的に移動できるようになることは、障害者にとって、自立の大きな条件となる。そのためには、触図訓練によって、空間認識を、より広く、正確に行えるようになることが、歩行訓練とともに、重要だということを知った。

もうひとつの驚きが、彼らの住んでいる世界の狭さである。私たちは普通、テレビや写真集などで、砂漠や島や宇宙を見、列車に乗っては、変わっていく景色を見ることができる。そして、そこに住む人々の暮らしに興味をひかれることによって、世界を広げていく。しかし、その感動を、口や文字で伝えることは、実際にはとても難しい。生徒を連れて旅行をする時、弱視の生徒も含め、全員が全く車窓の方を見ず、ひたすらテープを聞いたり、喋ったりしている姿を見て、私は異様な気さえしたが、当然のことなのである。いきおい、彼らの住む世界はとても狭くなり、英語も数学も、たいへん優秀な生徒でさえ、自分の家と学校の位置関係を知らないといった状態なのであった。外国のこともしかりである。

こうした課題を抱えて、社会科教諭としての私はスタートした。まず、生徒たちには、自分が今どこにいるか、そこはどんなところなのか、またどこへどうやって行こうとしているのかななどを、常に頭の中に描かせるように指導した。それは校内から始まって、学校と駅、さらに家と、次第に範囲を広げていかねばならない。また、地理の授業内では、生徒が未知の世界への興味を広げるように、できるだけ現物を持っていく心がけをした。ヤシの実、マンゴー、さとうきび、ライ麦パン、雑穀飯……。生徒は食べることに関しては、恐れを知らない。

正直なところ、いろいろな問題を抱えた生徒が多く、クラス担当としての仕事に追われ、社会科教諭としての“業績”は、見るべきものがない5年間であった。しかし、生徒は明るく、素直で、もっと知りたいという欲望に満ちている。見えなくて気の毒という同情は不要だった。世の中には目が見えないからこそわかる真実も、たくさんあった。そのことを私に教えてくれ、私の価値観を変えてくれた5年間として、私はとても感謝している。

(27回生)